

受賞報告

日本草地学会賞を受賞

九州沖縄農業研究センター飼料生産グループの服部育男グループ長が「九州・沖縄地域における新たな飼料資源（イネ、焼酎粕、サトウキビ）の貯蔵・利用技術の開発」により2016年度日本草地学会賞を受賞しました。本賞はわが国における草地農業の発展上顕著な意義をもつ研究業績をあげた学会員、または、わが国の草地農業の推進あるいは新技術の開発・普及などに関し顕著な寄与をなした学会員に授与されます。

九州沖縄地域には全国の55%の繁殖雌牛が分布し、全国の52%の繁殖経営体が存在するなど、わが国における肉用牛の生産基地です。一方で本州地域と同様に飼料生産基盤は脆弱なことから、水田を活用した粗飼料生産が強く望まれています。また、南西諸島においてはそもそも耕地面積が少なく、自給粗飼料の十分な生産が困難です。他方、九州地域は全国の2割の食品製造業者が集中する食品産業基地でもあり、食品製造副産物の有効利用技術の開発が望まれています。服部グループ長はこうした背景から、行政の重点施策、新たな環境規制、画期的な新品種の開発などにより、新たに利用拡大が見込まれるようになった飼料資源について、貯蔵技術を基軸とした九州・沖縄地域における利用技術の開発に取り組んできました。

飼料用イネの利用が拡大する中で、専用収穫機の開発に農機メーカーと共同で取り組み、飼料用イネや飼料作物を収穫できる汎用性の高い収穫機を開発しました。また、九州地域では年間に推定で約80万t以上の焼酎粕が産業廃棄物として海洋投棄などにより処分されてきましたが、ロンドン海洋投棄条約批准に伴う国内法の改正で2006年4月1日より海洋投棄が原則禁止となりました。そのため、焼酎メーカーは乾燥処理プラントを建設し、焼酎粕を処理してきました。しかし、乾燥には多くの化石エネルギーが必要であったことから、比較的エネルギー投入が少なくてすむ濃縮段階の焼酎粕を有効利用できないかの検討も行われていました。服部グループ長は処理プラントメーカーなどと共同で飼料としての利用に組み込み、濃縮処理を行った焼酎粕が発酵TMR原料として有効なことを明らかにしました。さらに、飼料用サトウキビはこれまでの基幹牧草で

あるローズグラスの約2倍の乾物を生産し、また、10年以上の再生利用が可能であることから、南西諸島の畜産に有望な飼料作物として普及し始めていますが、栽培方法や利用技術などの情報が不足していました。服部グループ長は、収穫の障害となる倒伏の回避、収穫物の貯蔵法、牛の増体への影響などについての研究プロジェクトを推進し、技術開発に取り組んできました。

以上の研究成果ならびに講演、普及誌の執筆、マニュアル作成など普及への取り組みが評価されました。

【関連情報】

最新の汎用収穫機を利用した飼料イネ・飼料作物の生産技術（プレス）

https://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/press/laboratory/karc/040285.html

焼酎粕濃縮液を活用した発酵TMRの牛への給与技術

https://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/publication/files/KARC_C_News_No47_p08.pdf

飼料用サトウキビ「しまのうしえ」の栽培マニュアルと発酵TMR利用マニュアル（プレス）

https://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/press/laboratory/karc/057041.html

